

# 淡路島でイナゴの大発生

竹 田 俊 道

島内で、イナゴの多く見られたのは、昭和30年代の前半までで、この頃までは、イナゴを食したという人もかなりいた。

南淡町福良で、昭和42年頃まで見たという話も聞くが、いづれにしても、その後は絶滅したものとされた。それが今年の8月に入って、本会会員の藤富正昭氏によって北淡町育波でイナゴの群棲が報じられるや、南淡町刈藻でも、数千匹の群棲を確認するに至った。実に30年振りである。

一旦、絶滅していたものが、他から持ち込まれて増えたものか、細々と生息していたものが急激にふえたものか、定かでないが、筆者の調査では、前者であろうと考えられる。ただ、今回島内で確認されたイナゴは、全てハネナガイナゴであり、これまでの兵庫県下の記録はコバネイナゴだといわれている。(藤富氏談)。

昭和30年代の島内でのイナゴが、果たしてどちらだったのか、確かな記録がなく不明だが、これも意見は二分されていて定かでない。もし、この頃の標本・記録をお持ちの方がいれば、是非ご一報頂きたい。

現在、島内での発生密度は、刈藻が一番高く、青刈田の点在、農薬散布が少ない等の条件が適合しているものと思われる。

地元の話では、4年程前から少し見られたとの事で、筆者も1979年10月21日、阿那賀でハネナガイナゴ1♀を採集しているが、この時は、フェリーで持ち込まれたものと想定していたが、既に発生していた可能性も考えられる。

参考までに、県下の記録も挙げておくと、丹波・篠山盆地では、1974年秋から急激にイナゴが増え(小林桂助氏)、筆者も1975年11月に多数採集している。この時は全てコバネイナゴだったが、モズのはやにえで、コバネイナゴ、ハネナガイナゴの両方を記録しているし、赤穂市千鳥ヶ浜でも、ハネナガイナゴのはやにえを報告している(小林桂助、鳥と自然 第36号)。

## タマムシ幼虫の食樹について (2)

筆者は本誌30号で、タマムシ *Chrysochroa fulgidissima* 幼虫の食樹としてヤブニッケイとビワを報告した。1988年7月5日には、洲本市安乎町のナルトミカンの枯枝の中から、前羽のまだやわらかい本種の成虫を1頭採集したので記録しておきたい。(堀田 久)